

平成二十六年十月十日発行  
皇學館論叢第四十七卷第五号 抜刷

研究ノ一ト

## 野津鎮雄と野津道貫の研究

——明治六年の政変による下野を中心に——

羽  
柴  
良  
子

## 野津鎮雄と野津道貫の研究

—— 明治六年の政変による下野を中心に ——

羽柴良子

はじめに

野津鎮雄・道貫兄弟（以下鎮雄、道貫と略記する）は、明治六年の政変で多くの薩摩人が西郷隆盛（以下西郷と略記する）の後を追って次々と下野する中、東京に残ることを決意し西郷等と決別した。そして四年後の明治十年（一八七七）に起こった西南戦争では政府側について戦い、その時の功績が認められ後の地位を確固たるものにした。野津兄弟が下野しなかった理由は一体何であったのか、その理由は従来多くの書籍等で「私情を捨て大義名分を守るため」と位置付けられているが、果たして本当にそれだけの理由

であったのだろうか。野津兄弟を扱った研究は非常に少なく、筆者が知る限り野津兄弟に関わった研究で明治初期から西南戦争辺りを扱った先行研究は僅少且つ断片的に存在するばかりで、野津兄弟に関わらず「下野」の理由に焦点を絞った研究は管見の限り確認することが出来なかった。薩摩人の大量下野は明治六年の政変後に起きた事実として淡々と受け入れられ、今日まで明治六年の政変で東京に留まった者が何を考えて留まったのかについては意外に研究されていないように思われる。筆者はそこに研究の余地を見出した。当時の野津兄弟の社会的立場や心情などを踏まえ、下野することなく東京に留まり西郷軍と戦ったのは、大義名分の為だけではなかったことを証明し

たい。

なお本稿では、『野津鎮雄・野津道貫兄弟の事蹟』と『野津元帥の面影』を史料として特に重視している。『野津鎮雄・野津道貫兄弟の事蹟』は道貫の遺族によって書かれたもので、実際見た事は勿論親しくしていた人物からの証言も記録されており、『野津元帥の面影』は道貫の唯一の伝記で、道貫と関わった人物によって東京朝日新聞等に寄稿された記事と、著者である長剣生氏が見聞したことをまとめ編纂されたものである。野津兄弟が今日に至るまで成した偉業に比べ研究されてこなかったのは、野津兄弟が直接的に残した史料が僅かであることも無関係ではないだろう。晩年道貫の伝記を作成する話が持ち上がった際、道貫は「予には幼少よりの日記あり細大の事、残らず記しあれば別に傳記の必要なかるべし」と言<sup>(一)</sup>って笑って断つたというが、その日記は現存していない。野津兄弟の感情の動きを主とした研究をする場合、多くは傍証に頼る手段しか残されてないことを御了承いただきたい。

## 第一章 野津兄弟と明治六年の政変

### 第一節 野津兄弟と征韓論問題

明治六年（一八七三）十月、征韓論問題を巡って明治政府が分裂する明治六年の政変が起きた。征韓論とは当時政府の首脳であった大久保利通・木戸孝允等が外遊し日本を空けている間に、留守政府の首脳であった西郷隆盛・板垣退助等によって主張された、朝鮮に使いを派遣しその開国を迫ろうという主張である。板垣退助等は強く武力による出兵を主張したが、西郷自身の主張は武力を持って開国を迫るのではなく、西郷自身が開国を勧める遣韓使節として朝鮮に赴くというものであったとも言<sup>(二)</sup>うが、西郷が征韓論に固執して譲らなかった事實は変わらない。征韓派の代表は西郷隆盛、非征韓派の代表は大久保利通（以下大久保と略記する）で、両者はお互い薩摩藩出身で且つ親友同士でもあった。その二人が征韓論を巡り対立し、激しい論争の末敗北した西郷は、故郷である鹿児島へと帰郷してしまった。西郷の帰郷に伴い西郷と考えを同じくする者と、近衛兵団を中心に東京にいた多くの薩摩人達が辞表を提出し西郷の後を追った。そのため明治政府に多くの空席ができ、政府はそれに苦慮するだ

けでなく、日本国内であたかも独立国のような体をなしてしまつた鹿児島に手を焼くこととなる。薩摩人等が下野した大きな理由は、薩摩人だけに限らず全国の武士に言えることだが、明治政府が出来て以来四民平等や徴兵制の施行により武士である特権を奪われたという不満がある。特に薩摩藩出身者は他藩出身者に比べてその意識が強く、それを西郷が抑え続けていたのだが、その西郷自身が辞表を提出し東京を後にしたため、今まで抑えられていた明治政府に対する不満が爆発し、東京を去つたのである。

しかし同じ薩摩藩出身である野津兄弟は東京に残つた。二人は幼くして両親を亡くし別々の家で育てられたが、道貫が成人したのを機に二人は再び同居を始め、明治四年（一八七二）に西郷が御親兵を率いて上京するのと同行し、この時初めて陸軍に身を置いた。生まれ育つた方限（薩摩藩独特の言い回し）は違ふが、文久元年（一八六一）の頃には、野津兄弟の家で西郷と大久保（高麗町で生まれ、後下鍛冶屋町に移つた）を含む勤皇の志士達が国家を論じたり、その後の鳥羽・伏見の戦いや会津戦争などを西郷の下で戦うなど、野津兄弟と西郷・大久保兩人との関わりは深く、上原勇作（道貫の娘婿）によると寺田屋事件の後道貫は西郷からその気性を見込まれ実印を預けられていたといふ。（三）野津兄弟は、西郷から深く信頼されていたのである。

#### 野津鎮雄と野津道貫の研究（羽柴）

このように西郷から深く信頼されていたながらも野津兄弟が大恩ある西郷と行動を共にしなかつたのは、従来「西郷との情誼よりも、大義の重んずべきを唱へて、明白に其進退を決し、敢然として東京に留つた」（三）や、「あくまでも大義名分を守る立場に立つて、大西郷と袂をわかつ」（四）、などのためとされてきた。ここでいう大義名分とは、

謹んで大義を誤ることなかれ。夫れ往時武門封建の世にありては、士各其の郷國にありて、乃主に竭すは固より其の分なり。今や然らず、王政維新天下第一君、苟も此を去りて何處に力を致さんと欲するかと。（五）

とされるように、「明治維新が起り國家（天皇）の軍人となつた以上國家のために働くことが本分であり、それこそが軍人の職務であり義務である」ということである。しかし本稿はこの「私情を捨て大義名分を守るため」だけでなく、他の様々な要因もあり西郷に従い下野をせず東京に残る決心をしたのではなかつたかと考え、考察を加えていくものである。

#### 第二節 明治六年の政変と薩摩人の下野について

野津兄弟と同じく西郷の後を追わず東京に残つた薩摩人がいる。のち著名となつた西郷従道、大山巖、樺山資紀等と同様で

ある。この三人の下野しなかった理由は特段理由もなく東京に留まった薩摩人以外の下野しなかった理由を特徴的に表している。

まず西郷の実弟である西郷従道(以下従道と略記する)は、兄である西郷を深く尊敬しその片腕として働いていたが、外遊を機に西洋の文化に触れた従道は、外遊後の明治四年十二月に陸海軍の軍備を充実させ国防の完全を期すべきとする建白書を奉呈するなど、西郷が唱えた征韓論に終始反対の姿勢を示し、兄弟の情から非常に苦しみながらも下野することはしなかった。

西郷の従兄弟である大山巖(以下大山と略記する)は、明治六年の政変が起こった際、スイスに留学中で征韓論とは無縁であったが、岩倉具視(以下岩倉と略記する)と三条美美に西郷に再び東京へ戻るよう説得して欲しいと乞われ、留学を中断し帰朝した。大山の説得をもってしても西郷は東京に戻ることにはなかったが、留学し西洋の発達した技術を目の当たりにしていた大山は、大久保の意見に賛成し、下野することはしなかった。

樺山資紀は薩摩武士の典型のような好戦的な人物であり、西郷好きで大久保嫌いであつたため下野しなかったことの方が不思議な気さえするが、樺山は常日頃から西郷の片腕として働いていた桐野利秋(以下桐野と略記する)と馬が合わず、さらに樺山は保身をはかるきらいがあつたため、政府に不満を持ちながらも

下野しなかったのはこのような理由からだと思われる。

以上にもてきた下野しなかった三人の理由をいくつかに分類すると、

(イ) 外遊の経験があり、大久保の唱える国内改革の優先案に賛同したため。

(ロ) 日本国内におらず、征韓論とは無縁であつたため。

(ハ) 西郷を慕っていたが、部下である桐野利秋等と仲が悪かつたため。

に分けられる。まず(イ)の外遊経験については、この当時の野津兄弟に外遊の経験はない。野津兄弟の大久保の国内改革案への賛否は史料が乏しく不明であるが、後述する徴兵制については賛成している節が窺える。(ロ)についても前述の通り外遊・留学をしていないので当てはまらない。(ハ)については後述するが、これは樺山資紀に限らず明言こそ避けたが従道も暗に桐野を嫌い、桐野により西郷が道を間違ふ羽目になつたと感じていたようである。桐野への感情的反発が原因で東京に残つた薩摩人は存外多かつたらしく、意外なことだが桐野へのこの感情的反発は下野することを思い止まらせた無視できない要因なのである。筆者は完全に条件の当てはまらない(ロ)を除き、(イ)(ハ)について慎重に考察を加えていく。

### 第三節 明治六年の政変後の野津兄弟

西郷は明治六年十月二十三日に辞表を提出した。西郷が参議の職を辞したと聞いた薩摩人達が次々に西郷の後を追つたため、東京は一時騒然となった。明治政府が騒動の鎮圧に奔走するこの時、鎮雄が何を考へどのように動いていたのか、木戸孝允(以下木戸と略記する)の同年十月二十八日の日記から読み取ることが出来る。

西郷俄に歸國、薩の兵隊士官其始より朝鮮論を主張し、東西奔走至于今日、士官中議論二端、其一は辞表を出し其國へ歸らんと主張、其一は朝命を奉し不可動と云。(中略)

福原一介野津少将薩人之處に至る。聞得するところ近衛兵三分の二鎮定の論に傾き、其二の下士官今夕異議の士官へ面會して存意を陳述し鎮定を謀る。(句読点を適宜補つた。以下同様)

鎮雄は明治六年の政変が起きた際、近衛兵団に所属する傍ら軍政を司る陸軍省に出仕しており、近衛兵団がいる近衛局におらず陸軍省にいた。近衛兵団は薩摩藩出身者が多く、西郷の四天王と呼ばれた桐野利秋・篠原国幹・別府晋介・辺見十郎太も将官・佐官として近衛兵団にいた。しかし桐野利秋や別府晋介、辺見十郎太は西郷が辞表を提出したことを知ると直ぐに西

野津鎮雄と野津道貫の研究(羽柴)

郷の後を追つて東京を去り、大久保は帰郷しまいと踏んでいた篠原は二十五日の召集に現れず、行方をくらましてしまつていた。(五)そのため彼らに次ぐ、もしくは彼らと同等の立場に立つ薩摩人から状況を聞き出す必要が木戸にはあつた。鎮雄は桐野や篠原と同じ陸軍少将であり、当然であるが薩摩人に精通し且つ大久保だけでなく西郷とも関わりが深く、西郷に付くかもしれぬという不安さえ除けば状況を聞くのに理想的な人物であつた。木戸の翌二十九日の日記には、

福原一介今朝野津少将の處に至り、昨夕下士官異議士官に面し、其末野津の處に至り議論に服すと雖も、一旦辞表を出し又俄に其節を改むるに不忍、依て三日の後熟考する云々の趣を報せり。(二〇)

とある。鎮雄は西郷と行動を共にしようとしている者と議論し、その否であることを説き帰郷を思い留まらせようと説得を試みている。さらに木戸の同年十月二十九日付けの伊藤博文宛書簡には鎮雄の考へが記されている。

野津云く今日は皇居へも被召候よし。愚按に而は鎮火可致と相考、たとへ鎮火不致とも暴動に至り候などと申事は無之御受合可申と申候よし、尤變之生じ候事は皆不用意に起り候故、精々注意無之而は不相成事と奉存候。(二一)

木戸の日記と書簡では道貫について触れられていないが、

「鎮雄公の事蹟」にこの時の野津兄弟の動向が僅かに記されている。

彼等は兄弟共に近衛兵の同盟帰国を思ひ止まらせようとなめたが、近衛に於ける僅の同志を留められたのみでなだれかかった大勢を如何ともすることは出来なかつた。<sup>(二二)</sup>

道貫は兄の鎮雄に従い、鹿兒島に帰るか迷っている者や帰郷せんとしている者達の説得に協力して事態收拾に努めていたようである。

しかし東京の混乱と動搖は鎮雄の言葉とは裏腹に鎮火してはいなかつた。明治六年の政変から約三ヶ月後の明治七年（一八七四）一月十五日の日付で、スイスへ留学中の大山の元へ、岳父吉井友実<sup>(以下吉井)</sup>から手紙が届けられた。

征韓論相發し西郷憤然勃興使命を奉し朝鮮國之鬼とならんと其猛烈不可當、大久保拒之而些共不動（中略）西郷引て國に歸れり。續て中村篠原等を初め屈竟之壯士數百歸歸す。土州又多く退職す。信吾野津兄弟等殘而陸軍を収むといへども人心紛々擾々昔日之日本にあらす。<sup>(二三)</sup>

吉井の手紙によれば三ヶ月経つても東京の混乱は治まっておらず、如何に信吾（従道）や野津兄弟が残つて陸軍を治めていても、人々の心は落ち着きを取り戻していないという。文中の中村とは、嘗て中村半次郎と名乗っていた桐野のことで、文中

に名前を出ている西郷、桐野、篠原等は明治六年十一月には既に故郷鹿兒島に到着している。しかし一月になつてもまだ西郷の下野によつて引き起こされた混乱は収束していない。その状況を打破するべく、岩倉や三条実美から命じられた吉井は悲鳴のような手紙を大山に宛てたのである。

大山に宛てたこの手紙から、

(二) 従道と並べて名前を出していることから、野津兄弟は陸軍の薩摩藩出身者の中で重きを置かれていた。

(ホ) 明治七年一月十五日の時点で野津兄弟は東京に残ることを決意し、木戸以外の明治政府首脳等もそのように理解していた。

ということが伺える。吉井と野津兄弟は同じ薩摩藩出身で旧知の仲であつたが、近衛兵団の將校であつた桐野や篠原が下野した今、野津兄弟が陸軍において有力者且つ拠り所となつていたのは事実であろう。桐野や篠原といった薩摩系の陸軍將校が大量退職した後陸軍に留まつていた薩摩系陸軍將校は従道や大山、それに鎮雄等の極少数であつたからである。

土佐藩出身の谷干城<sup>(以下谷)</sup>は、当時のことをこう振り返っている。

六年の征韓論では當時の英雄豪傑も大いに進退に迷つて薩州出身の武辯の多くが大西郷に従つて歸国する際、野津兄

弟は些も悪るびれたる振舞なく斷然踏み留つて親分の西郷に従はなんだ、此一事は大西郷の失望となると同時に時の政府に取つては偉大なる力となつたのである<sup>(二四)</sup>

「些も悪るびれたる振舞なく斷然踏み留つて」とあるが、人前ではそう見せていても大久保・西郷と共に幕末の騷乱を戦い抜いてきた野津兄弟の心の中は嵐のように吹き荒れていたであろう。野津兄弟は西郷と大久保という両雄の眷顧を長年受けてきた手前、二人の争いに心を痛めたことは間違いない、文字通り大義名分と恩愛や義理の間に挟まれて苦しんだ。しかし野津兄弟の苦しみはともかく、実力者であつた兄弟二人が政府に留まつたことは谷が言うように「政府に取つては偉大なる力」となつていたのだろう。そうであるから、吉井も手紙に野津兄弟の名を記したと思われる。

## 第二章 桐野利秋と野津兄弟

### 第一節 徴兵制を巡る桐野利秋と野津兄弟

元々徴兵制は大村益次郎(以下大村と略記する)によつて提唱された。大村は近代軍制を指導・創設したが、急激に進めたため士族等から不満を買い、結果暗殺されてしまう。大村が残した徴兵制

野津鎮雄と野津道貫の研究(羽柴)

の種を継いだのは、嘗て奇兵隊の一員として戦い、徴兵制を布くドイツを含む欧米諸国の軍制を視察した山県有朋(以下山県と略記する)であつた。視察を終えた山県は明治天皇に巡遊の報告を終えた後兵部省に入り、兵部小輔の地位を与えられ大村の後継者となつた。山県の予想通り、大村の時と同じく徴兵制に対する反對論がいたるところから浮上した。とりわけ士族は激しく反對し、その急先鋒が桐野であつた。谷の「隈山詒謀録」には桐野が如何に徴兵制に反對していたのか、当時の様子が詳しく記されている。

殊に桐野は最も徴兵主義に不満なりし。(中略)此時桐野の不平は殆ど絶頂に達せり。余に對し山縣太輔を罵りて曰く、彼れ土百姓等を衆めて人形を作る、果して何の益あらんやと。山縣を罵るは即ち余を罵る者也。元來桐野は徴兵を忌み、兵は士族に限るものと考ふるか如し。散々不平を鳴して去れり。<sup>(二五)</sup>

この時の野津兄弟について、『野津元帥の面影』にも谷の証言が残っている。

山縣が洋行して歸るや現行の徴兵制度を唱へたるに際し、桐野等は之に反對し、兵士は士族より採らざる可からず、山縣の議論は人形を作らんとするものなり、人形を作りて何にするかとして痛く反對したるも、野津兄弟は其の否なる

を辯じて山縣論に賛成したりき<sup>(一六)</sup>

谷は徴兵制を巡る桐野等の言動を実際に見聞きし、それを「隈山詒謀録」の中に書き残している。その内容と『野津元帥の面影』の谷の証言は言葉遣いに多少の違いがあるものの内容がほぼ同じものであることから、野津兄弟が徴兵制に賛成し、その必要性を説いていたということから、この記述の信憑性は高い。しかしこの当時薩摩人達は、

當時薩州人は、山縣は徴兵好きだ。之を補佐して、徴兵制を布かしたものは、我が西郷従道だ。従道こそ怪しからぬ曲者だ。宜しく彼を暗殺すべしなど云ふ論があつた位であつた。<sup>(一七)</sup>

というほどの不穏な空気の中にあつた。徴兵制への激論は山県だけでなく山県を補佐していた西郷の実弟である従道にすら暗殺論が持ち上がっている。山県の徴兵制に賛成した野津兄弟への桐野等からの風当たりも当然厳しいものであつたと推測されるのが自然である。

薩摩藩出身の有馬藤太の回顧録『維新史の片鱗』にこのような話が残っている。<sup>(一八)</sup> 徴兵制が布かれる頃、中村楼という店で西郷の元に主だった者が一同に集められた。その際従道は、「陸軍省などに居て威張つて居る」という理由で、到着した途端「取つて投げられ、這々の體で逃げ」出している。鎮雄の名は

回想の中に挙げられていないが「主だった者」が集められた席に弟の道貫がいて、兄である鎮雄がいけないのはおかしい。鎮雄がいたら野津兄弟と書く筈であるので、鎮雄は身の危険を感じて欠席していたのかもしれない。徴兵制施行のことで徴兵制反対派の気が立っていたのは間違いなく、従道を投げ飛ばした理由の「陸軍省などに居る」には徴兵制施行に加担している、という意味も含まれていたことはほぼ間違いないであろう。徴兵制施行で気が立っているとわかつていて、しかもその徴兵制の片棒を担いでいるのだから、従道も顔を出せばただでは済まないことぐらいわかっていたはずであるし、従道と同じく陸軍省に勤めていた鎮雄も同様である。そうであつたから、早々に逃げ出していたのかもしれない。

野津兄弟が徴兵制に賛成した理由には兄の鎮雄が、山県が徴兵制を主張していた期間、兵部省そして陸軍省に出仕していたことが関係していると思われる。鎮雄は兵部省に勤務し、兵部省廃止後も陸軍省で軍政に関わっていた。山県と鎮雄は出身藩こそ違うが、徴兵制の話が出た際上司と部下の関係にあつたため、鎮雄は山県から徴兵制の重要性を聞かされていたであろうし、直接山県から聞かずとも軍制の創設に参加しているのであるから軍人と武士の違いをよく理解し、万人から徴兵する必要性と重要性を知った筈である。鎮雄が兵部省と陸軍省にいたこ

とは、山県の徴兵制施行に賛同したことの一要素に違いなく、  
〔イ〕外遊の経験があり、大久保の唱える国内改革の優先案に賛同したため〕の後半に合致する。そして明治六年には野津兄弟は二人揃って陸軍省に出仕し、鎮雄は「工兵」を任務とした第四局長を務め、道貫は「歩兵・騎兵」のことを任務とした第二局副長を務めて軍政に関与していた。第一局第二課では、桐野等を激昂させた「徴兵」を扱っていた。明治六年の政変で西郷を追ひ鹿児島に帰郷した薩摩人は近衛兵団から殆どであったが、野津兄弟は近衛局ではなく陸軍省にいたため、動乱の旋風から僅かに外れていたのである。

## 第二節 桐野利秋への道貫の感情的反発

桐野に対する感情的反発の重要さは既に述べた。桐野は良くも悪くも感情の起伏が激しく、敵も多く煙たがられる存在であったようである。しかし道貫の場合に至っては、桐野は煙たがられるだけでは済まず、確固たる殺意すら抱かれていた。

京都の藩邸で赤松小三郎（以下赤松と略記する）より砲術を習っていた道貫は、慶応三年（一八六七）九月三日に中村半次郎（桐野）等によって「幕府からの密偵」の疑いで赤松を暗殺されてしまう。道貫と赤松の出会いには慶応元年（一八六五）に遡る。薩英

野津鎮雄と野津道貫の研究（羽柴）

戦争後江戸に上った道貫はそこで赤松と出会い、赤松は翌年京都に居を移し私塾を開き、薩摩藩に乞われ京都の薩摩藩邸で道貫を含めた約八〇〇人に英国式兵学を教えた。道貫は赤松の学識も人間性も信頼し鹿児島藩に招いたら藩のためになると考え上役に会わせようと並々ならぬ苦心を重ねていた。しかし討幕を目指していた薩摩藩と異なり、赤松が「政治上では「幕薩一和」を唱え公議政体を主張した」ために、赤松は実は密偵で幕府に報告する犬だという浮説が流れ、親しくしていた道貫もその渦中に巻き込まれ、赤松は暗殺された。「藩のためにも、種々奔走したことが水泡に帰し、道貫は、藩の将来のためにも、また、誤解のうちに命を落した赤松小三郎のためにも、大へん残念がった」という。

有馬藤太によれば、「野津などは、自分等の師範で有る赤松氏が何者かに殺されたと云ふので、仇討を企てた」が赤松を殺したのが誰だったのか、「トートー分らず仕舞に成つた」という。野津とは道貫のことで、有馬藤太は道貫が敵討ちを企てたが誰によって殺されたかわからず断念したと述べているが、道貫は犯人が誰であるのかわかっていたのではないかと睨む。桐野はこの当時から既に「人切り半次郎」という二つ名をつけられるほど人を切っており、内外問わず一目おかれていた。その上赤松が暗殺される直前道貫と出会ったことを桐野は日記に記

している。

折柄今日東銅院四条通、西へ入町にて出合候ニ付、不可捨置之者にて、夫より小野・中島・片岡の三士は、烏丸四条南角ニまんぢう屋在り、此の処ニ為待置(またせおき)、田代と僕右赤松の跡ヲ追ひ附候処、四条より東銅院ヲ伏見之様(方向)下り候ニ付、追ひ候処、仏光寺通にて屋敷者野津七次(道貫)外ニ式人在、赤松と相角致し、おひ手を通り、我々は五条下る迄越し、跡へ引返し候処、魚棚上ル所にて出合、我前に立ふさかい、刀ヲ拔候処、短筒に手ヲ掛候得共、左のかた(肩)より右のはら(腹)へ打通候処、直ニたおるる所ヲ、田代士後よりはろふ(扨)、巷余り歩ミたおる也、直ニ留(とどめ)ヲ僕打ツ、合て式ツ刀、田代も合て式ツ刀にておわる、打果置者也、夫より直ニ引返し、右の三士の居る処まで来る、五士同行にて帰邸宮也(二六)

桐野は小野清右衛門等と散歩をしていたところ赤松を見かけ、田代五郎左衛門と赤松を追いかけた。その途中の仏光寺通で、道貫と桐野は顔を会わせていたのである。わざわざ日記に道貫の名を記したところに、桐野が道貫の顔を見て何かを感じ躊躇したように感じられる。道貫と別れてすぐ桐野等は赤松に追いつき、赤松は殺された。道貫が赤松の遺体を直接見たのかは史料がないためわからない。しかし見たのならば、その傷痕

から桐野がしたのだと一目でわかっただろう。また見ていなくても桐野がした、ということは赤松暗殺の直前顔を会わせその尋常ではない様子からだいたい察しがついたに違いない。敵討ちを企てる程憤りながらも行動に移さなかったのは、おそらく確固たる証拠がなく(五人は固く口を噤んでしまっていた)、また西郷が桐野に一目置いており、実行した後の自分の処遇は兎も角藩のために奔走している兄への迷惑を恐れたからではないか。

ともあれ、道貫は敵討ちを企てるほど赤松が暗殺されたことを無念に思い、その犯人に対して確固たる殺意を抱いている。幕末動乱のこの時代、敵討ちを企てるのは相当の覚悟の上と言っている。しかも桐野が赤松を暗殺する原因とも言える「幕奸」、つまり赤松が幕府の密偵であるという浮説は赤松と親しくしていた道貫をも巻き込み、面白くない評判と共に名誉を傷付けられるようなことがおきた。赤松が殺されては汚名を晴らすことも出来ず、藩を思つてのこれまでの努力も全て水泡に帰した道貫が桐野に感情的反発を覚えたことは寧ろ当然のことといえ、その怒りの大きさは計り知れない。この一件が筆者の推論通りであったなら、下野しなかつた理由の一つの「(八)西郷は慕っていたが、部下である桐野利秋等と仲が悪かつたため」に合致する。

おわりに

本論では何故野津兄弟が西郷の後を追ひ鹿兒島に下野しなかったのか、その理由が従来言われている「私情を捨て、大義名分を守るため」だけではなく、「徴兵制を巡る薩摩人内での対立」と「道貫と桐野との感情的対立」を加えて筆者なりの見解を示した。前述した通り、野津兄弟の直接的な史料は少ないため傍証に頼ることが圧倒的に多く、筆者の考察も推測の域を出ていないかもしれない。しかし残された史料を基に、可能な限り真実に近付けたつもりである。

今回の野津鎮雄・道貫兄弟の研究は、明治六年の政変後の下野を巡る薩摩人達の心理的・立場的關係を含めた今までの歴史観に一石を投じる試みであった。「徴兵制を巡る薩摩人内での対立」と「道貫と桐野との感情的対立」を見れば、兄弟二人が下野しなかったのは決して「大義名分のため」だけとは言えないのではないか。御親兵として藩を出て軍人になったため、勿論大義名分を守るためでもあったであろうが、そこには徴兵制を巡る薩摩人内での対立に、赤松の暗殺を巡る桐野利秋に対する感情的反発もあったのではないか。少なくとも、道貫が西郷率いる西郷軍を討つべく鹿兒島の地に立ったときにはそのような

な感情があったに違いない。直接的な史料が乏しいテーマで論証は難しく、些か推論を逞しくした点もあったが、あくまでも史料に即ての推論を心がけたつもりである。

〔註〕

- (一) 長劍生『野津元帥の面影』（皆兵舎、明治四十一年）四一、四二頁。
- (二) 浜口美智子『野津鎮雄・野津道貫兄弟の事蹟』（私家版、昭和四十八年）四五頁。
- (三) 近世名将言行録刊行会編『近世名将言行録第三卷』（吉川弘文館、昭和十年）一八九頁。
- (四) 前掲『野津鎮雄・野津道貫兄弟の事蹟』四五頁。
- (五) 牧野謙次郎『維新傳疑史話』（私家版、昭和十三年）五九頁。
- (六) 栗原智編『桐野利秋日記』（PHP研究所、平成十六年）一九二頁所収。
- (七) 前掲『維新傳疑史話』一三二、一三三頁。
- (八) 日本史籍協会編『木戸孝允日記』二（東京大學出版會、昭和四十二年）四三九頁。
- (九) 日本史籍協会編『大久保利通文書』五（東京大學出版會、昭和四十三年）一二七頁。

- (二〇) 前掲『木戸孝允日記』二、四四〇頁。
- (二一) 日本史籍協会編『木戸孝允文書』五(東京大學出版會、昭和四十六年)七二頁。
- (二二) 『鎮雄公事蹟』第一號。
- (二三) 大山元帥伝刊行會編『元帥公爵大山巖』(大山元帥伝刊行所、昭和十年)三六〇頁。
- (二四) 前掲『野津元帥の面影』七六、七七頁。
- (二五) 谷干城『隈山詒謀録』島内登志衛編『谷干城遺稿』上(靖猷社、明治四十五年)一三八、一三九頁。
- (二六) 前掲『野津元帥の面影』七八頁。
- (二七) 徳富猪一郎編『公爵山縣有朋傳』中卷(山県有朋公記念事業會、昭和八年)二〇九頁。
- (二八) 有馬純雄『維新史の片鱗』(日本警察新聞社、大正十年)二八四～二九七頁。
- (二九) 秦郁彦編『日本陸海軍総合辞典〔第二版〕』(東京大學出版會、平成十七年)一一一頁。
- (三〇) 前掲『日本陸海軍総合辞典〔第二版〕』四九六～四九八頁。
- (三一) 前掲『維新傳疑史話』一九頁。
- (三二) 藤沢直枝編『赤松小三郎先生』(信濃教育會小県部會、大正六年)五、六頁。
- (三三) 国史大辞典編集委員會編『国史大辞典』第一卷(吉川弘文館、平成五年)七〇頁。
- (三四) 前掲『野津鎮雄・野津道貫兄弟の事蹟』二七頁。
- (三五) 前掲『維新史の片鱗』三〇一、三〇二頁。
- (三六) 田島秀隆編『京在日記桐野利秋』(出版社不明、昭和四十五年)四頁。
- (はしばりようこ・平成二十五年度  
皇學館大学文学部国史学科卒業生)

野津鎮雄・道貫兄弟年表

和 暦	月	事 項
天保六	九	【鎮雄】野津鎮圭、美代の二男として誕生。(長男・三之丞は幼くして早世)
天保十二	十一	【道貫】野津鎮圭、美代の三男として誕生。
弘化三		鎮圭死去。
嘉永四		美代死去。
		【鎮雄】折田家に預けられる。
		【道貫】土橋家に預けられる。
文久元		【兄弟】道貫が二十歳になったのを機に、一軒家を構え再び同居する。
文久二		【鎮雄】大山清大夫の娘国子と結婚。
文久三		【兄弟】藩主島津久光に従い重中小姓として上京。帰路生麦事件起きる。
文久四	七	【兄弟】薩英戦争に従軍。
慶応元		【兄弟】京都の御所警備中に蛤御門の変が起きる。
慶応二		【道貫】江戸にのぼり下曾根甲斐守の塾に入る。
		孝明天皇崩御。
慶応三		【野津兄弟】京都で討幕の準備を進める。
		【道貫】帰郷。
	九	赤松小三郎が暗殺される。
明治元	一	【兄弟】鳥羽、伏見の戦い。
		【鎮雄】五番隊長
		【道貫】六番小隊長。六番隊長が戦死、六番隊長となる。
	二	【兄弟】東征軍として上京。

明治七	三	佐賀の乱。
	一	【道貫】 大佐、近衛参謀長心得。
	十	【兄弟】 明治六年の政変起きる。
明治六	三	【道貫】 陸軍省第二局副長。
	九	【鎮雄】 陸軍少将、築造局長。
	八	【道貫】 中佐、近衛局分課。
明治五	五	【鎮雄】 明治天皇の西国への巡幸に供奉を仰せ付けられ随行。
	八	【鎮雄】 兼兵部少丞。
	七	【道貫】 陸軍少佐、御親兵第一大隊長。
明治四	七	【鎮雄】 陸軍大佐兼兵部権大丞。
	三	【道貫】 藩兵三番大隊付教頭。
	三	【兄弟】 御親兵として上京。
明治二	三	【鎮雄】 御親兵大隊長。
	三	【鎮雄】 国歌制定に奔走。
	三	【兄弟】 五稜郭の戦いに従軍。
	十二	【道貫】 高島嘉兵衛の娘、登女子と結婚。
	十	【兄弟】 帰郷。
	八	【道貫】 二本松の戦闘に参加し負傷。三週間の入院。江戸に護送されることとなったが、本隊を追う。
	八	【道貫】 六番隊隊長。重傷を負う。
	八	【鎮雄】 五番隊隊長。
	八	【兄弟】 東北地方平定の為従軍。

明治八	四	【鎮雄】 征討指揮官として熊本鎮台へ。 【鎮雄】 兼熊本鎮台司令長官代理。
明治九	六	【鎮雄】 熊本鎮台司令長官。
明治九	七	【鎮雄】 東京鎮台司令長官。 【道貫】 アメリカのフィラデルフィア万国博覧会に出張。初の外遊。
明治十	二	【鎮雄】 有栖川宮殿下の鹿児島県行きに警備司令官として随行。 【兄弟】 二十五日、西南戦争起きる。 【鎮雄】 征討第一旅団長。 【道貫】 征討第二旅団参謀長。
明治十一	十一	【鎮雄】 陸軍中将。
明治十一	十二	【鎮雄】 中部監軍部長。
明治十一	八	竹橋事件起こる。 【道貫】 近衛参謀長。
明治十一	十一	【道貫】 陸軍少将、陸軍省二局長。
明治十三	十二	【道貫】 東京鎮台司令長官。
明治十三	六	【鎮雄】 明治天皇の西国への巡幸に供奉を仰せ付けられるがカルタ性肺炎悪化の為辞退。
明治十三	七	【鎮雄】 二十二日死去（享年四十六歳）
明治十七	二	【道貫】 鎮雄の養子となる。
明治十七	七	【道貫】 大山巖に従い欧州に出張。 【道貫】 華族令。子爵となる。
明治十八	一	【道貫】 帰朝。
明治十八	二	【道貫】 伊藤博文とともに清国に渡る。

明治三十一	五	【道貫】陸軍中将、広島鎮台司令官。
明治二十七	八	【道貫】広島第五師団長。広島の発展に尽力。
明治二十八	三	【道貫】日清戦争。第五師団師団長として出征。
	十二	【道貫】山県に代わり第一軍司令官となる。
	八	【道貫】陸軍大将。
	十一	【道貫】伯爵となる。
明治二十九	五	【道貫】近衛師団長。
	十	【道貫】東京防禦総督。
明治三十三	四	【道貫】東京都督。
明治三十七	一	【道貫】教育総監。
	二	【道貫】軍事参議官。
明治三十九	六	日露戦争勃発。
	一	【道貫】第四軍司令官。従軍。
明治四十	九	【道貫】元帥の称号を得る。
明治四十一	十	【道貫】侯爵となる。
	夏	【道貫】幽門狭窄症と診断される。
		【道貫】大勲位に叙し、菊花大綬章賜う。
		【道貫】十八日正二位に叙される。死去(享年68歳)